

【共生システム理工学研究科 環境放射能学専攻（博士後期課程）カリキュラム・ポリシー】

（教育課程の編成）

ディプロマ・ポリシーに示した人材育成を達成するために、「基礎科目」「応用科目」「講究科目」の3科目区分を設定している。これらの他に、指導教員の所属する研究プロジェクトに参加し、異分野を含む研究プロジェクトメンバーから多面的、実践的視点に立った助言・指導を受ける。

〔基礎科目〕

博士後期課程に就学するにあたっての基礎的素養として修得しておくべき科目。興味ある分野の高度専門知識を実践的に修得する。

〔応用科目〕

環境放射能に関する高度な知識を有する研究者・専門職業人として必要な専門的力量、学識を涵養するための科目。専門分野が異なる教員数名により研究手法・発表方法等を指導し、専門知識を融合・深化するとともに多元的な視点から発展させる能力を涵養する演習科目を含む。また、非専門家に対して専門知識をわかりやすく伝えるサイエンスコミュニケーション能力の涵養も行う。

〔講究科目〕

自立した研究・開発を遂行できる能力を涵養するための研究活動。研究の成果は博士論文として取りまとめた後、審査委員会での審査を受けた上で、研究発表（最終試験）を行い、それらの結果を踏まえて研究科委員会での審査を受ける。

博士論文の審査では、研究テーマ、関連研究の調査、研究方法、論文構成、オリジナリティ、倫理基準の遵守についての妥当性を異分野を含む審査員により評価する。また博士論文を提出するにあたっては、そのレベルの国際性や客観性の観点から、国際学会等に報告し、英語で記述された論文を有すること、またはそれと同等の業績を有することを必要条件とする。

（教育・学習方法）

学生が、ディプロマ・ポリシーに掲げた諸能力を獲得できるよう、講義、演習、実験・実習を体系的に実施する。対話や討論、研究成果の発表を通じたプレゼンテーション能力を涵養する機会等を実施することによって、本専攻が掲げる教育目標の達成を図る。

（学習成果の評価）

成績は、S、A、B、C、及びFの5段階をもって表し、S、A、B、及びCを合格、Fを不合格とする。各授業科目では、シラバスにレポートや最終試験、実技・実演、作品等といった当該科目の「成績評価の方法」を明記し、可能な限り複数の評価手段によって成績を判定する。

博士論文の審査においては、博士論文審査基準に基づき厳格な審査を行う。